

9 伝えるということ

私には今、守り続けている伝統がある。「誹戸の田植踊」、これは、浪江町誹戸地区に何百年も昔から受け継がれている伝統芸能だ。しかし今、この伝統が途切れつつある。

私がこの踊りに興味をもったのは十年ほど前、近所の祭りで見たのがきっかけだ。幼いながらにかっこいいと思い、踊りたいと思うようになった。しかし、この踊りの募集がかかるのは小学校四年生から。当時はまだ一年生だった私は、「四年生になったら絶対踊り子になる。」と心に決めていた。

その後四年生になった私は田植踊のメンバーに加わり、二月の第三日曜日に行われるお祭りでは踊りを奉納するようになった。家族や親戚はもちろん、近所のかたや友達がこの踊りを見て笑顔になってくれるのがとてもうれしく、六年生になるまでこの踊りを続けた。

「来年からは中学生になってしまうから、もうこの踊りには参加できないのか……。」そう思いながら踊りを奉納した二週間後、東日本大震災と原発事故が起こった。漁師町だった誹戸地区は津波に襲われ、私の家は流されてしまった。祖父母や友達もなくなった。もちろん、神社の社務所にあった踊りの衣装や小道具も流されてしまった。探しに行こうにも原発事故の影響で立ち入り

すら許されないため、それもできない。踊りの復興は絶望的だった。「もうあの踊りを踊ることも、見ることもできなくなってしまうのだろうか。」と避難先でよく考えていた。そんなある日、私のもとに一本の電話がかかってきた。

「もう一度田植踊を踊りませんか。」

うれしいと思うと同時に、踊りのことを考えていたのは自分だけではなかったのだと知ると胸が熱くなった。

震災から四か月後、ついに「誹戸の田植踊」が復活した。場所はいわき市のアクアマリンふくしま。本当は誹戸で踊りたかったけれど、避難区域になっているのでしかたがない。当時の私は何も感じていなかったが、大人のかたは「この状況で踊ってもよいのだろうか。」と複雑な気持ちだったそうだ。本番、ステージから客席を見ると、浪江町の町長さんをはじめ、たくさんの浪江のかたがたが見に来てくださっていた。本当に復活できたんだと思うとよけいに緊張し、体がガチガチになってしまった。しか



④「誹戸の田植踊」(2008年) 豊漁や豊作を祈る「安波祭」で奉納されました。



「伝統を守る」こと、
どうしたことだろう。

①浪江町
福島県双葉郡浪江町。

学びの
道しるべ



- 1 「私」はどんな思いで、踊りを残そうとしているのだろう。
- 2 「伝統を守る」のは、なんのためだろう。
- 3 地域の伝統を守るために、あなたには何ができそうだろう。

れだけ多くのかたがたに支えられていたのだと思うと、感謝と感動で胸がいっぱいになる。この言葉では言い表せないほどの感謝をどうやって伝えたらよいのか。そう考えた時、私は「感謝の気持ちを忘れずにこの伝統を守り続けていくことで、皆さんに恩返しができるのではないかと」思い、今でも感謝の気持ちを忘れずに踊りを続けている。いずれ、自分が大学生、社会人になるにつれてこの伝統を受け継いでいくことが難しくなってしまうだろう。そうなる前に、今いる数少ない後輩に私が踊りをとおして感じてきた感動や感謝、この踊りが人々に与えてきた感動を伝え、大切な伝統を守っていつてもらいたいと思う。そして、私自身も今後時間を見つげながら少しでもこの伝統に関わっていきたいと思う。

文・横山和佳奈（生徒作文）／第二十九回「感動作文コンクール」受賞作品

神宮、出雲大社……さまざまな場所が多いときには月二回踊ることもあった。

このように「請戸の田植踊」が復活できたのは、私たちの知らないところでたくさんのかたがたが動いてくれたからである。「もう一度踊らないか」と声をかけてくれた保存会のかた、震災後にこの踊りの存在を知り、「伝統を断つてはいけない」と立ち上がってくださった県文化財保護審議会委員のかたや、いわき市の神社の宮司さん。衣装制作をしてくださった呉服屋さんやいろいろと支援をしてくださったかたがた……私たちは本当にたくさんのかたたちに支えられて踊りを踊ることができている。復活公演当時は中学一年生だった私も今は高校生になり、改めてこ



④ 福島市に作られた仮設住宅で「請戸の田植踊」を踊る子どもたち(2016年)

し、いざ踊りだすと緊張はすぐにほぐれ、いつものおりの踊りができた。終わったあとに改めて客席を見ると、感動したと涙を流しているかたがいた。その時、「ああ、私でも人を感動させることができるんだ」と感じた。

この復活公演以降、「請戸の田植踊」にはたくさんの出演依頼が寄せられるようになった。もともとは年一回しか踊らなかった踊りが、震災後は伝統芸能大会や明治